

「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)の形成とその 特質：グリム童話集(KHM)の美的教育学的次元

岡本，英明

九州大学大学院人間環境学研究所国際教育環境学講座：教授：教育人間学

<https://doi.org/10.15017/959>

出版情報：大学院教育学研究紀要. 1, pp.243-264, 1999-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究所
達・社会システム専攻教育学コース

バージョン：

権利関係：

「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)の形成とその特質

— グリム童話集 (KHM) の美的教育学的次元 —

岡 本 英 明

I

グリム兄弟の『グリム童話集』(初版1812/1815年, 第七版1857年), 正確には『子どもと家庭のメルヘン集』(“Kinder- und Hausmärchen”, 以下KHMと略記)は, ドイツ語で書かれた書物の中で最も数多く発行され, 最も多く他の言語【デンマーク語(1816/1820年), オランダ語(1820年), 英語(1823/1826年), フランス語(1830年)を初めとして現在までに約70カ国語】に翻訳され, そして最も普及した読み物である。ドイツの子どもたちは数世代にも互ってごく自然に『グリム童話集』に即して彼らの語感(Sprachgefühl)を鍛え, 発達させてきたとされる。我が国においても1887年(明治20年)に最初の邦訳である桐南居士(菅了法)訳『西洋古事神仙叢話』⁽¹⁾【英訳版からの重訳(英文の副題は“FAIRY TALES”)で11話(KHM 57, 81, 39-I, 6, 133, 9, 62, 39-II, 29, 88, 21)】が東京の集成社から上梓されて以来, 現在に至るまで非常に多くの訳書, 研究書, 解説書, 選集, 絵本などが刊行されている。ちなみにインターネットで検索してみると, タイトルにグリムのKHMないし『グリム童話集』を含むもので現在入手可能な本は, ドイツ本国の出版物では46冊, 我が国の出版物では34冊ある。その中で全訳に関しては, KHM『大版』(“Große Ausgabe”)の最終版である第七版(1857年)の三種類の全訳のみならず, 第二版(1819年), 初版(1812/15年), 1810年の祖稿(「エーレンベルク手稿」)の全訳まで出版されている。

ところでグリム兄弟, すなわち兄のヤーコプ・グリム(Jacob Grimm, 1785-1863)と弟のヴィルヘルム・グリム(Wilhelm Grimm, 1786-1859)がドイツの民衆(Volk)の中で語り伝えられてきた民話であるメルヘン(昔話, 童話)を収集するようになったそもそもの切っ掛けは, 後期ロマン派の詩人ブレンターノ(Clemens Brentano, 1778-1842)が彼の義兄弟で歴史法学者のザヴィニー(Friedrich Karl von Savigny, 1779-1861)に宛てた問い合わせの書簡(1806年3月22日付け)であった。すなわち, ブレンターノとアルニム(Achim von Arnim, 1781-1831)が19世紀前半のロマン主義の時代精神の中でドイツの古い民謡を集めて出版し, ドイツの自然と歴史に対する愛情と国民的意識を高めた『少年の魔法の角笛』(“Des Knaben Wunderhorn”)⁽²⁾の続巻の編纂の手伝いをしてくれる適当な人物がいないかとのブレンターノの問い合わせに答えて, ザヴィニーは弟子のヤーコプ・グリムを推薦したのであり, 弟のヴィルヘルム・グリムもその仕事に参加した。

1807年の秋にブレンターノはカッセルにおいてグリム兄弟と一緒に『少年の魔法の角笛』の続巻の

準備をし、グリム兄弟はブレンターノの指導の下に口承や印刷物から少なくとも28歌（ヤーコプが13歌、ヴィルヘルムが15歌）を書写して『少年の魔法の角笛』の続巻（第Ⅱ巻、第Ⅲ巻、付録の「子どもの歌」）に寄与している。それらは匿名で発表されてはいるが、ハイデルベルク大学附属図書館、マールブルク大学附属図書館、ベルリン国立図書館（プロイセン文化財保管）などに保存されている手書きの草稿⁽³⁾の筆跡から、グリム兄弟が記録したものであることが判明している⁽⁴⁾。これらの歌はグリム兄弟の最初の出版物であると同時に、彼らの民俗学的研究の最初の例証でもあるという意味で重要である。1807年の末にヤーコプ・グリムは、カール・ネールリヒ（Carl Nehrlich, 1773-1849）の1798年刊の小説『シリー』（“Schilly”）から幾つかの民謡風の挿入歌を抜き書きしたのみならず、この小説の中の挿話「千匹皮（姥皮）」（Allerlei Rauch）を要約⁽⁵⁾した。これがグリム兄弟が記録した最初のメルヘンであり、したがって1807年末がグリム兄弟のメルヘン収集の誕生した時に当たり、この頃からグリム兄弟は体系的にメルヘンと伝説を最初は主として印刷物から集め始めたのである。

ブレンターノ自身は既に1805年末以来メルヘン集を編集することを計画していたが、1809年にヴィルヘルム・グリムに書簡を送って、自分の蔵書を貸す代わりにグリム兄弟が集めたメルヘンの原稿を出版するので貸してくれないかと申し出ている。さらに1810年9月3日にブレンターノが再度グリム兄弟に催促したのに応えて、同年10月25日に兄弟は彼らの集めた数々のメルヘンの手稿をブレンターノに送付した。しかし、天才肌で多血質のブレンターノは結局それを印刷にも回さず兄弟に返却もしなかったため、この手稿はブレンターノの死後行方不明になってしまったが、ようやく世紀末にエルザス・ロートリンゲン地方のエーレンベルクにあるトラピスト修道院の図書館で、ブレンターノの遺稿の中からこの幻の手稿が発見され、「エーレンベルク手稿」（Ölenberger Handschrift）ないし「KHM祖稿」（KHM-Urfassung）⁽⁶⁾と呼ばれている。

Ⅱ

ヴッパータール大学のハインツ・レレケ（Heinz Rölleke）の研究⁽⁷⁾によれば、この「エーレンベルク手稿」には全部で49話が記録されているが、この中の28話はヤーコプ、14話はヴィルヘルム、その他の7話は4人の異なる提供者の手によって書かれている。この49話の中の43話が、ヤーコプの手によって鉛筆書きでナンバリングされている。ナンバリングのない6話のうち、ヤーコプによって鉛筆で線を引いて抹消された「イングランドの王様」（“Vom König von England”）の話を除いた5話は、グリム兄弟が1810年10月25日にブレンターノに送付した手稿ではなくて、ヤーコプが他の機会に送付した話をブレンターノが追加したものである。ナンバリングされた中の24、28、30、33、38番が欠番になっているので、これらはブレンターノに送付されなかったことになる。1番から6番までの話（動物グループ）とその他の話は、共にアルファベット順に並んでいるので、したがって欠番の24番は、ヤーコプが1810年10月17日付けのブレンターノ宛ての書簡で送付しない旨を伝えている話の中の「漁夫と欲の尽きない妻」（“vom Fischer und seiner unersättlichen Frau”）、28番は「スズメの話」（“Geschichte vom Sperling”）、33番は「ネズミと焼きソーセージのこと」（“von Mäuschen und Bratwurst”）と同定される。さらに、30番と38番の話が失われているが、1812年に刊行されたKHM

初版第一巻に収められた86話の中に、「エーレンベルク手稿」には無い話が54篇ある。その中の6番の「夜啼きウグイスとめくらトカゲ」(“Von der Nachtigall und der Blindschleiche”)と、7番の「くすねた銅貨」(“Von dem gestohlenen Heller”)が、アルファベット順から考えて、それぞれ「エーレンベルク手稿」の38番と30番と推定される。

グリム兄弟は用心のため予めこのオリジナル原稿の写しを取っておいたが、これが幸いして、アルニムの勧めで1812年に出版したKHM初版第一巻86話の約3分の1がこの書写を基礎にすることが出来たのであった。ところで、グリム兄弟は原稿が印刷されると元の原稿を廃棄するのが常であったので、この書写もすべて既に破棄されたと思われていたが、この書写の一部がベルリン国立図書館(プロイセン文化財保管)の手稿部門に保存されている「グリムの遺稿」(Nachlaß Grimm)の中にあることを、レレケが1978年に発見した⁽⁸⁾。現にその後1997年になって出版された『グリム兄弟の遺稿』(カタログ)の中の“[1800] Nachl.Grimm o.Nr.C”の項目に、次のような記載がある。“C2, 3: *französische Kindermärchen*. 42 Bll. Darin: <…> 20-21 Der Drache (NN). 22-23 Märchen von Faufreluschens Haupte (NN). 24-27 Die alte Hexe (NN). 28-33 Murmelthier. Liron (NN). <…> C2, 6: *Slawisch*. 10 Bll. Darin: 2-4 Die goldne Ente (NN).”⁽⁹⁾ すなわち、これらの書写は「エーレンベルク手稿」所収の話の20番「竜」(“der Drache”), 22番「金のカモ」(“die goldne Ente”), 23番「ファンフレルッシエンの首の話」(“Märchen v. Fanfreluschens Haupte”), 31番「年とった魔女」(“Die alte Hexe”), 37番「マーモット(リロン)」(“Murmelthier. Liron”)の5篇である。これらの破棄を免れた5篇の書写の発見によって、次のことが明らかになった。すなわち、①「エーレンベルク手稿」の書写が実際に存在したこと。②書写をした人はグリム兄弟のどちらでもないこと。③書写は、ブレンターノに送付されたオリジナル原稿と比べてなんら本質的な変更はなされていないこと⁽¹⁰⁾。

1807年以後グリム兄弟は口承メルヘンの提供者たち【グレートヒェン・ヴィルト (Gretchen Wild, 1787-1819), ドルトヒェン・ヴィルト (Dortchen Wild, 1793-1867), ヴィルト夫人 (Frau Wild, 1752-1813), フリーデリケ・マンネル (Friederike Mannel, 1783-1833), ハッセンプフルーク家 (Familie Hassenpflug), 「マールブルクのメルヘンおばさん」(‘Marburger Märchenfrau’) など】による寄与を得て彼らのメルヘン収集を拡大して、1812年にKHM初版第一巻86話を刊行し、続いてドロテア・フィーマン (Dorothea Viehmann, 1755-1815), ハクストハウゼン家 (Familie von Haxthausen), イェニー・フォン・ドロステ=ヒュルスホフ (Jenny von Droste-Hülshoff, 1795-1859) その他の提供による口承メルヘンを得て、1815年には初版第二巻70話を出版した(したがって初版は全部で156話となる)。さらに、1819年には第二版(二巻本)170話(「子どものための聖者伝」“Kinderlegenden”9話を含む。以下同じ)、1837年には第三版(二巻本)177話【それまでは売れ行きがはかばかしくなかったが、この第三版以後はベストセラーとなった】、1840年には第四版(二巻本)187話、1843年には第五版(二巻本)203話、1850年には第六版(二巻本)210話(「子どものための聖者伝」10話を含む。以下同じ)が出版された。そして1857年には第七版(二巻本)210話が刊行され、これが最終版となったが、初版から最終版までには多くの話や文章の追加や削除が見られる。

また、KHMの『小版』（“Kleine Ausgabe”）【50話、弟の画家ルートヴィヒ・エーミール・グリム（Ludwig Emil Grimm, 1790-1863）の描いた7枚の銅版画の挿絵付き】⁽¹¹⁾が、イギリスでエドガー・テイラー（Edgar Taylor, 1793-1839）の翻訳（1819年のKHM第二版からの抜粋）で1823年に第一巻31話（1826年に第二巻24話）が出版された英訳版“German Popular Stories”⁽¹²⁾【風刺画家クルックシャンク（George Cruikshank, 1792-1878）の挿絵付き】に倣って1825年に刊行されたが、これは大変好評で1858年の10版まで版を重ねた⁽¹³⁾。

したがって、KHMはグリム兄弟の生存中には全部で17版（『大版』は1812/1815年から1857年の間に7版、『小版』は1825年から1858年の間に10版）が出版された訳であるが、それらのテキストはどれ一つとして他の版と同一ではない。その他に、KHMのグリムによる注釈本⁽¹⁴⁾が1822年（改訂版1856年）に別巻（第三巻）として出版された。ちなみに、全二巻のKHM初版（1812/15年）の出版以来、グリム兄弟は収集した多くの口承メルヘンの記録を初版の第三巻として刊行する予定であった。この計画は第二巻の売れ行き不振のため実現されなかったが、様々な提供者や兄弟自身によって書き留められたテキストの大部分はベルリン国立図書館（プロイセン文化財保管）の手稿部門に「グリムの遺稿」（Nachlaß Grimm）として保存されている。この中の48話が1977年にレレケによってテキスト批判的に編集して出版された⁽¹⁵⁾が、これによってKHM初版のいわば第三巻がおよそ160年遅れで刊行されたことになる。

Ⅲ

ところで、今日ではグリム兄弟のKHMはまさに『子どもと家庭のメルヘン集』として児童文学そのものであることに何ら疑う余地はない。しかしドイツ文献学を志したグリム兄弟のKHMの出発点は、産業革命による家族構造の変化や、義務教育施行による読書能力の普及などによって消滅の危機にあった口承の民衆文芸（Volks poesie）や神話を救い出して保存することであって、子ども向けの童話や児童文学を集めたり、ましてや自分自身で執筆したりすることではなかった。つまり、当初は彼らにとってメルヘンは口承の民衆文芸の学術的証拠に過ぎなかったものであり、それ自身の固有の権利を有していなかったのである。これに関してロタル・ブルーム（Lothar Bluhm）も次のように述べている。「兄弟が1812/15年に全二巻のメルヘン版を初めて刊行したとき、彼らは子どもの友になる（kinderfreundlich）読み物ではなく、—同様に1816/18年に刊行された『ドイツの伝説』（“Deutsche Sagen”）と共に—学術的な資料集を出したのであり、そこでは彼らの見解によれば民間伝承の中で保持されている“生粋のドイツの神話”（urdeutscher Mythos）の残滓が確定されて保存されるべきであった。」⁽¹⁶⁾

しかるに注目すべきことに、1812年の初版から1857年の最終版までの45年間に、KHMの性格は根本的に変貌した。レレケによれば「収集の当初から1819年の第二版まではまだ明瞭に匿名で口承の伝統が前面に立っていたが、それ以後はメルヘンのテキストを編集上より一層強力で改訂（Überarbeitung）する中で自己関与が限りなく大きく前面に押し出されてくる」⁽¹⁷⁾。つまり、ロマン主義的に色付けされてはいるが第一に学術的に意図された収集活動から、市民的な子ども部屋に合わ

せて裁断された子どもと家庭向けの童話へと変貌したのである。それは何故に、またどのようにしてそうなったのであろうか。

そもそも歴史的に見て本来、メルヘンないし民話 (Volksmärchen) は子どものための娯楽ではなくて、夜のつれづれなどに話し相手となって慰める「伽」(とぎ)ないし「御伽」(おとぎ)の際に語る御伽噺(おとぎばなし)【例えば我が国の室町期の「御伽草子」など】であって、労働、遍歴、軍隊生活、死者の通夜(夜伽)などと結び付いていたのであり、もともと大人相手の噺であった。子どもの友(Kinderfreund)としての御伽噺(Kindermärchen)は19世紀に近代市民社会になって成立したのであって、グリムの時代によく女性がメルヘンの語り手になったのである。16世紀から19世紀に至るメルヘンの変遷を概観すれば、例えば16/17世紀のイタリアのストラパローラ(Giovanni Francesco Straparola, ca. 1480-1557?)の粗野でしばしば卑猥なメルヘン『楽しい夜』(“Le piacevoli notti”)や、バジレ(Giambattista Basile, 1575-1632)のアレゴリーやイロニーに富んだメルヘン『ペンタメローネ』(“Pentamerone”)の社会的場は宮廷であって聞き手は大人の男性であり、17/18世紀のフランスのペロー(Charles Perrault, 1628-1703)の繊細で洗練されたメルヘン『過ぎし昔の物語ならびに教訓』(“Histoires ou contes du temps passé, avec des moralitéz”)の社会的場は貴族のサロンであって聞き手は女性社会であった。また、18世紀末のドイツのムゼーウス(J.K.A.Musäus, 1735-1787)のメルヘン『ドイツ人の民間メルヘン集』(“Volksmärchen der Deutschen”)は伝説、説話、民間メルヘン、笑話、逸話などを素材にした合理主義的説明や社会風刺やイロニーに満ちた再話であり、知的教養層の娯楽のためのメルヘンであった。

ようやく19世紀初頭になってヨーロッパ社会に成立した市民的小家族と“Kinderstube”(子ども部屋、[比喩的に]子ども時代のしつけ)の形成によって、同時代のグリムのメルヘンの社会的場は家庭となり、聞き手は子どもとなったのであり、その際に“stubenrein”(淫猥でない、婦女子の前で話しても害にならない)への一般的傾向が顕著である。これについてレレケは次のように述べている。「市民的な家族観念、独立人格としての子どもの全く新しい尊重、微温的なビーダーマイヤー(Biedermeier)様式の世界観—それは19世紀のヨーロッパの社会史であるが、同様に例えば20世紀後半の日本の社会史にもほぼ完全に一致する—が、幾世代にも互ってグリムのメルヘンを熱烈に受け入れることへの常に新たに重要な前提であったし、現在でもそうである。」⁽¹⁸⁾

こうした時代的社会的背景に加えてKHMの性格が変貌した大きな原因は、一方では初版第一巻のぎこちない文体と退屈な内容をもっと芸術的に改訂して子ども向きの本にすべきだと異口同音にグリム兄弟に迫ったブレンターノとアルベルト・ルーデヴィヒ・グリム(Albert Ludewig Grimm, 1786-1872)⁽¹⁹⁾の辛辣な批判であり、他方では上述したエドガー・テイラーの英訳版の出版であった。ちなみに、グリム兄弟はこの英訳版(テイラー版)を二巻とも所蔵していた⁽²⁰⁾。しかし、このグリム兄弟の蔵書であったテイラー版の第一巻(1823年)は1981年にアメリカのペンシルベニア大学に買い取られ、その後ボストンの古本屋 Bromer Books によって売りに出されたが、売上証以外の手掛かりは最早存在しないという⁽²¹⁾。なお、テイラー版の第二巻(1826年)には、20話のKHMの他に、ビュッシング(J.G.Büsching)の民話集から2話、オトマル(Otmar)から1話、ティーク(L.Tieck)

の“Phantasmus”から1話が含まれている。また16番の話“The Nose”は、KHM 初版第二巻の36番「長い鼻」(“Die lange Nase”)が第二版からはKHM 122の注釈にダイジェスト版で入れられたものの英訳である⁽²²⁾。

このテイラー版(第一巻1823年)は、その簡潔で愛らしい「物語風の子どもらしいトーン」(erzählender Kinderton)⁽²³⁾が兄のヤーコプ・グリムによって称賛されたが、それが弟のヴィルヘルム・グリムによるKHM『小版』(“Kleine Ausgabe”)の構想に直接的な影響を及ぼして、メルヘンのテクストを言語的、文体的にテイラー版のもつ「物語風の子どもらしいトーン」に合わせるよう努力された。但し、この英訳版第一巻で訳されたKHM33話【英訳版の17番“The Adventures of Chanticleer and Partlet”はKHM 10, 41, 80の3話が一つに合体されている】のうちの18話がKHM『小版』(50話)に採り入れられているに過ぎない。したがって、話の選択に関してはこの英訳版はヴィルヘルム・グリムにとって特に模範にはなっていない。兄のヤーコプ・グリムもテイラー版の話の選択は「大したことはない」(“nicht sonderlich”)⁽²⁴⁾としている。このKHM『小版』の出版(1825年)は成功を収め、ここに選ばれた子ども向きの50話が現在に至るまでグリム童話の最もポピュラーな代表作となっているが、反面において文献学的なバラストが相対的に失われている。ここでは、グリムのロマン主義の眼が学術にはではなく、まさに子どもと家庭に向けられている。

IV

以上において指摘したKHMの二重性格、すなわち口承の民話としてのメルヘンと、子どもの友(Kinderfreund)としてのメルヘンについて、例えばカミンスキー(Winfred Kaminski)は、グリム兄弟が1819年のKHM第二版の序文において彼らの努力目標として、口承文学と神話の歴史への貢献と並んで「教育の書」(“Erziehungsbuch”)の提供という全く相違した事柄を挙げていることに、驚きを隠していない⁽²⁵⁾。

実はグリム兄弟が「教育の書」という要請を初めて明確に述べたのは、1819年のKHM第二版ではなく、既に初版第二巻(1815年)の序文(1814年9月30日付け)においてであった。すなわち、「しかしながら、私たちはこのメルヘン集によって、ただ単に文芸(Poesie)の歴史に寄与することだけを欲したのではありません。メルヘンの中で生き生きとしている文芸自体が、文芸が喜びを与えることのできる人に作用して喜びを与えるように、それ故にまた本来的な教育の書(Erziehungsbuch)がそこから生成するようという意図も同時にありました」⁽²⁶⁾。この文章からも明らかのようにグリム兄弟は、メルヘンそれ自体が人に喜びを与えることがいわば民衆教育(Volkserziehung)になるとして、KHMの二重性格に矛盾がないこと、つまり民話(Volks-Märchen)と童話(Kinder-Märchen)という二人の主人に仕え(zweyen Herren dienen)得る⁽²⁷⁾ことを示そうとしている。

さらにKHM第二版(1819年)の序文において、ヴィルヘルム・グリムはこの点を一層より明瞭に次のように述べている。「だからこの文学の中には、その故に子どもたちが私たちにはかくも素晴らしくそして至福に見えるあの純粋さ(Reinheit)が内的に貫き通っています。子どもたちは、いわば

同じような、青みがかって白く染みのない、キラキラ輝く瞳をもっています。他の四肢はまだか細くて弱々しく俗世の役には適さないのに、その瞳はもう十分に発達しています。私たちがこのメルヘン集によって、文芸と神話学の歴史に寄与しようとするばかりでなく、メルヘンの中に生き生きとしている文芸自体が、文芸が喜びを与えることのできる人に作用して喜びを与えるように、それ故にまた、それが教育の書(Erziehungsbuch)として役に立つように、ということをも同時に意図した理由はそこにあります。私たちがそういう教育の書に求めているのは、日常的に起こり決して隠しおおせないようなある種の状態や関係に関連するものを、小心翼翼として除去することによって得られる純粹さではありません。そのようなことをすれば、印刷された本において実行出来ることが、実生活においても実行出来るなどと錯覚してしまうことになります。私たちが求めているのは、不正なことを遠慮して隠したりしない率直な物語の真実の中にある純粹さなのです。]⁽²⁸⁾

すなわち、民間メルヘンの中には子どもと同じ純粹さ、自然さ、素朴さなどが貫き通っている。また、KHM第二版第二巻の前書き「子どもの本質と子どもの風習」においてヴィルヘルム・グリムは、聖書の中の「子どもたちを来させなさい。わたしのところに来るのを邪魔してはいけない。天の国は、このような人たちのものだからだ。」(マタイ伝 19.14)というイエスの言葉を引用して、子どもの本質について次のように述べている。「この聖書の箴言はあらゆる時代を通じて真であることが実際に示されます。差し込んでくる太陽によって色あせ俗世の塵芥によって濁らされる以前の花のように、どこでも人間の生命は純粹で無垢な色で(in reiner, unversehrter Farbe)立ち現れるのです。(中略)すべての人間に子どもの頃から天使が同伴すると人々は信じています。その点に、私たちが子どもたちの言葉や身振りが誠実で嘘偽りがなく愛らしい(treu, wahr und lieblich)様を見たときに感じる喜びもまた根拠付けられているのです。]⁽²⁹⁾

グリムが生きた時代のロマン主義思想の核心は、根源への回帰、つまり特に人間の発展のまだ粗悪化されていない力強い出発点へと回帰する「内部への道」(der Weg nach Innen)であり、それは取りも直さずグリム兄弟にとっては民衆文芸の純粹さと、子どものまだ損なわれていない純粹さへと回帰することであった。したがって、ロマン派文学の「こうした『美的教育学』(“ästhetische Pädagogik”)に、グリム兄弟とKHMは最初から義務づけられている」]⁽³⁰⁾のである。

しかるに他方において、「それによってKHMがその間に位置付けられている座標が申し立てられている。すなわち、文学(Dichtung)、科学(Wissenschaft)、教育学(Pädagogik)である。こうした玉虫色の変化が、グリムの自己表明を貫いている本来的な諸々の矛盾に寄与している」]⁽³¹⁾(傍線は引用者)というカミンスキーの批判を完全には否定出来ない。何故ならば、グリム兄弟はKHM第二版(1819年)の序文の中で、一方では「私たちは、子どもたちに相応しくない表現はこの新版では用心深く削除しました」]⁽³²⁾とっておきながら、他方ではそこから少し後の箇所「私たちは何一つとして勝手に付け加えることはしなかったし、言い伝え自体の細部や特徴に潤色することはせず、私たちが聞いた通りにその内容を再現しました。個々の表現や敷衍は大部分私たちに発しているのは言うまでもないことですが、私たちが気づいた特質はすべて残しておくようにしました」]⁽³³⁾と述べているからである。カミンスキーの指摘するこうした「矛盾」もまた、上述したその後のKHMの性格の変貌

と深く関わってくることになる。

V

ところで、1819年のKHM第二版と共にメルヘンの収集とKHMの編集の責任を一手に任せられた弟のヴィルヘルム・グリムは、KHM初版では各巻末に「付録」(Anhang)として掲載されていた学術的な注釈を、第二版からはテキストのみの二巻と切り離して断片、例証、文献などと共に別巻(1822年/1856年)に入れ、また初版の生硬で貧弱なテキストを再編集して改訂し、後に文芸学者のアンドレ・ヨレス(André Jolles, 1874-1946)が「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)⁽³⁴⁾と名付けたモチーフ的、文体的特性を輪郭付けて、これがそれ以後KHMの内容と形態のイメージを決定的に刻印付けたのであった。

とりわけ1825年の子ども向きの『小版』("Kleine Ausgabe")の成功と、1826年にシュヴァーベン
の天才的メルヘン作家で夭折したヴィルヘルム・ハウフ(Wilhelm Hauff, 1802-1827)に請われてカ
ロリーネ・シュタール(Caroline Stahl)の「恩知らずな小人」("Der undankbare Zwerg")を改作
した「雪白と薔薇紅」("Schneeweißchen und Rosenroth")をハウフの編集する『1827年用のメルヘ
ン年鑑』に寄稿して⁽³⁵⁾ハウフから得た高い評価とが、ヴィルヘルム・グリムにとってメルヘン改訂者
ないし脚色者としての自信と自覚を強めることになり、特に1837年のKHM第三版からは種々の類話
を混交(Kontamination)させたり、文体を推敲してしなやかにするなどして、「グリムのジャンル」
(Gattung Grimm)の彫琢に拍車がかかったのであった。これについて、レレケは次のように述べて
いる。「選択することと改訂することが、伝承されたものや受け継がれたものに対して、ことによる
とグリムのメルヘンの一層より重要な成分であるかも知れないという、最終的に1825/26年に獲得さ
れた自信は、それ以後どこまでも変わることはなかった。(中略)当初は、(ゲーテの文言によれば)
単に“民衆のものを民衆に返還する”ことから出発したのだが、1820年代半ば以後は、民間文芸の伝
承の選択と再現に関しては自己参与の方が決定的に高く評価されるべきだという洞察が地歩を占めた
のである。」⁽³⁶⁾

すなわち、ヴィルヘルム・グリムは古い民間メルヘンの真正なトーンとレパトリーを捜し求める
途上で歩一歩それに近づき得たと信じたが、実際には彼は新しい独創的な文芸ジャンルを創造したの
であり、古い不正確な聞き書きテキストの再現を、次第に明瞭に「グリムのジャンル」(Gattung
Grimm)へと確立されるメルヘンの理想型に対応するように作り替える権利と義務が生じたのであ
る。無論その際に、聞き書きテキストと理想型とがいずれも単独では底本となり得ず、むしろ両者は
相互に複雑に関連し合っているといういわゆる解釈学的循環(der hermeneutische Zirkel)の問題が
理論的には生じるが、レレケによれば、アルニムの媒介によってグリム兄弟は、ドイツ・ロマン派の
代表的画家で夭折したフィリップ・オットー・ルンゲ(Philipp Otto Runge, 1777-1810)の二編の
メルヘン聞き書きを知り得たが、それが「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)にとって実践的に
理想型となり、その後どこまでも影響力のある模範であり、いわばグリムのメルヘンの「原器」
(Urmeter)になったとされる。その二編とは、「漁夫とその妻」("Von dem Fischer un syner Fru")⁽³⁷⁾

「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)の形成とその特質

及び「ねずの木の話」(“Von dem Machandelboom”)⁽³⁸⁾である。

ルンゲはこの二篇を『少年の魔法の角笛』第I巻の献本を受けたお礼として出版者のツインマー(J.G.Zimmer)に送ったが、これをアルニムが1809年にグリム兄弟の求めに応じて貸してくれたのをヴィルヘルム・グリムが書写したのであった。この二篇は、どちらも北ドイツのポンメルン地方の方言による聞き書きであり、その方言がまずグリム兄弟を感激させた。方言はまさに民衆性、自然性、土着性、恒常性などをもつものであるから、「はっきりした方言は喜んで残すことにしました。もし、どの物語もそう出来たら、物語は疑いなく一層より良くなったことでしょう。ここに、言葉の高度な教養、洗練、技巧が駄目になる一つの事例が見られます。その精錬された書き言葉は、他のすべての場合にどんなに流麗であろうとも、より鮮明で透明になってはいますが、同時にまた一層より味気無いものになっており、もはや、それほどしっかりと中核に繋がってはいないことが、感じられます」⁽³⁹⁾と、グリムは1819年のKHM第二版の序文で述べている。

かくして、我々が前節で論じたKHMの二重性格の矛盾はグリム兄弟において理論的には遂に克服されなかったが、ヴィルヘルム・グリムが「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)を次第に確立することによって実践的に克服されたのである。以上のような経緯から、グリムのメルヘンが書物メルヘン、つまり読み物メルヘンとなったこともまた明らかになる。そもそもメルヘンの概念には次の三つが区別される。すなわち、民話ないし民間メルヘン(Volksmärchen)、読み物メルヘン(Buchmärchen)、創作メルヘン(Kunstmärchen)の三つである。民間メルヘンは口承文学に属し、創作メルヘンは創作文学に属している。ところで、グリムのKHMは一般には「民間メルヘン」と思われているが、実は読み物メルヘンなのであって、それは民間メルヘンと創作メルヘンのいわば中間に位置している⁽⁴⁰⁾。

VI

既に述べたように、ヴィルヘルム・グリムはぎこちない口伝えメルヘンの聞き書きテキストを編集改訂して、徐々に「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)と称されるしなやかに語られた独自の芸術作品に仕上げたのであるが、その際に物語を整合的に形成するために、しばしば様々な類話を混交(Kontamination)させたり、またテキストの民衆性(Volkstümlichkeit)と具象性を強めるために、民衆の間で使われている無数の慣用句(Redensart)を挿入したり、また直接話法を増やしたりして、全体的に民衆的で子どもらしいトーンを与えている。また、この「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)の同質性と統一的なトーンこそが、魔法メルヘン、動物譚、笑話、謎々物語といった非常に相異した様々な種類の民話をKHMに採り込んで編集することをヴィルヘルム・グリムに可能にしたのである⁽⁴¹⁾。かくして、「時折全くたどたどしいオリジナルな民間メルヘンのトーンと、高度に様式化された現代の創作メルヘンの物語様式の彼方に、何か全く新しいものが生まれたのである。多くの観点で完全と信じられていた失われた根源性を模索する途上において、ヴィルヘルム・グリムは彼独自のメルヘンのトーンを発見したのであり、そのトーンが—その本の内容と釣り合っ—グリム童話集の全く異例の成功を条件付けたのである」⁽⁴²⁾。

このようにして、ヴィルヘルム・グリムは「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)の確立を目指して、版を追うごとにテキストに手を入れて改訂していったのであるが、メルヘン研究家の小澤俊夫はこうした改訂を批判して、次のように述べている。「ひとことでいえば、ヴィルヘルムは、版をかさねるにしたがって、読む文芸としてのメルヘン、読まれることを期待したメルヘンにかたむいていったといわざるをえません。もちろん、1810年の手稿に見られるような聞き書きでは、これほどまでに愛読されるメルヘンにはなりえなかったでしょう。読まれるメルヘンとわりきって考えてみれば第七版は、それなりに、グリム流のスタイルを獲得しているといえるでしょう。けれども、ほんらい、口づたえであり、耳でしかれてきたメルヘンのすがたを尊重したい気持ちからすると、むしろ、第二版のほうが、それに近いといえるのです。わたしが第二版を日本の読者に紹介したいと思う、最大の理由は、ここにあります」⁽⁴³⁾として、1819年のKHM第二版を全訳して1985年に出版している。

さらに小澤は他の箇所でも、「20世紀になってから発展したメルヘンの文芸学的研究からみると、改筆が成功している場合と、メルヘンとしてはふさわしくない場合があることが明らかになりました。それでわたしは、あの45年間にわたる改版は、グリム兄弟、特にヴィルヘルムにとっては、メルヘンという口伝え文芸のスタイルを求めての模索の旅であったと思うのです。(中略)“ラプンツェル”の場合もやはりメルヘンのスタイルの模索の連続だったといえます。そこには口伝えメルヘンとして成功している場合と、読むメルヘンに逸脱している場合があることが分かりました。(中略)『グリム童話集』といえども神聖化せず、固定化せず、耳で聞く文芸という原点に立ち返って考えてみる必要があると思うのです。(中略)グリム童話は今でもたしかに子どもたちの心をひきつけますが、詳細に見ると、聞くメルヘンとしての特性を捨てて、読むメルヘンに変容している部分がかかなりあることを認めざるをえません」⁽⁴⁴⁾と批判している。

確かに、口伝えのメルヘンを印刷して読むメルヘンに定着させることは、口述による生産的な「語り変え」(Umerzählen)の終焉であり固定化ではあろうが、しかし、レレケがいみじくも指摘しているように、まさに「ヴィルヘルム・グリムの絶えざるテキスト変更(Textveränderung)のお陰で、少なくとも最終版まではグリム童話集の中にやはり動き(Bewegung)のようなものがどこまでも残っていた」⁽⁴⁵⁾のであり、「テキストが版から版へと多少とも変化したことによって、テキストもまた望ましく再び少し「流動」(in Fluß)——すべての口承文学の本質的特徴——し始めた」⁽⁴⁶⁾のである。

なかんずく小澤俊夫の批判は、グリム研究において1970年代に起こった「神話学的、文化史的なものから文献学的、社会史的なものへのパラダイム転換」⁽⁴⁷⁾を看過している。ブルームによれば、グリムのKHMの価値はもはや遙か過去にさかのぼる語り文化(Erzählkultur)の証左としてではなく、19世紀の精神史の重要なドキュメントとして評価される。すなわち「『グリムのジャンル』(Gattung Grimm)の歴史的考察——それは【KHMの】テキストをロマン主義とビーダーマイヤーの文学的(literarisch)現象としても把握しようとする——」⁽⁴⁸⁾こそが、現在のグリム研究のパラダイムなのである。その際に社会史(Sozialgeschichte)とは、社会解放的な機能に還元されるものではなく、人々の日常生活・生活慣行などを取り上げて人間社会の深層の全体的・構造的な解明を目指すもので「解釈学を補完する観点」(eine die Hermeneutik ergänzende Perspektive)⁽⁴⁹⁾としての謂であ

る。

VII

このように、ヴィルヘルム・グリムは絶えざる改訂の中で、民衆の間で使われている無数の慣用句 (Redensart) やことわざ (Sprichwort) を常に新たに挿入して KHM に民衆的で子どもらしいトーンを与えると共に、民俗的な言語遺産を再活性化することに少なからぬ貢献をしたのである。ブルームによれば「KHMの改訂および特に後から付け足されたことわざや慣用句による『民衆的な』その仕上げは、メルヘン集の後ほどの人気に本質的に寄与したのであり、そして事実それが初めていわゆる『グリムのジャンル』(A.Wesselski)の形成を実現させた」⁽⁶⁰⁾のであった。

同時代のギムナジウム校長にして作家のヘーベル (Johann Peter Hebel, 1760-1826) の手になる『暦話』(Kalendergeschichten)⁽⁶¹⁾、すなわち庶民が使うカレンダーに載せられた面白くて為になる短編集の中には、ことわざや慣用句が数多く登場しており、まさにそれらの宝庫である。このヘーベルの『暦話』の1811年版及び1813-1815年版がグリム兄弟の蔵書目録の中のNr.267に見出される⁽⁶²⁾。またこの蔵書目録によると「暦話」の1814年版には、ヤーコプ・グリムが「この本はヘーベルから私への献本である」と手書きでメモしている⁽⁶³⁾。これらの点から、ヘーベルの『暦話』がグリム兄弟に影響を及ぼした可能性も推定され得る。

このようなことわざ、格言、慣用句などへのグリムの関心は、ブルームによれば「民衆文芸」(Volkspoese)の包括的理念と「民衆教育学的」(volkspädagogisch)なコンセプトに基付いている。したがって「ことわざは、メルヘンそれ自体の中で断固として教化的=教授学的(moralisierend-didaktisch)な機能をもった、Volkの的確な生活の知恵としてイメージされる」⁽⁶⁴⁾。“Volk”の概念は、民衆文芸という枠組においては①国民的現象、②歴史的現象、③社会的現象、④美的現象(「純粹な」「自然な」「素朴な」などの形容詞で表現される)として、内在的に四重の次元を有するとされる⁽⁶⁵⁾が、ここで注目すべきは、こうして挿入されたことわざや慣用句がとりわけ農民や素朴な民衆の「生活世界」(Lebenswelt)に関連している点である。

グリムにとって、このような農民の「生活世界」は、当時のエリートたちの都会風のあか抜けした文化の中で失われてしまった恒常性、自然性、親密さなどを今なお維持していると思われた。グリム兄弟にKHM初版第二巻の大部分の、そして最良のメルヘンを語ってくれたあの上述したフィーマンおばさん【兄弟は彼女を生粋のドイツ農婦と思い込んでいたが、実は仕立て屋の親方夫人であった】のように、「同一の生き方を変えることなくずっと続ける人達にあっては、伝承されたものに対する愛着が、変化を求めがちな私たちが理解するより、強いのです。まさにそれ故に、伝承されたものは、幾重にも確認されていることですが、ある種の心に徹する親密さと、内的な優秀性を持っているのです。(中略)民間文学の叙事詩的な基盤は、満足させ、なだめ、一向に疲れさせない、自然全体を貫いて多様な色調で広がっているあの緑(das Grün)に等しいのです」⁽⁶⁶⁾と、グリムは言うのである。ちなみに、緑に対するこの畏敬の念は、同時代の詩人ヘルダーリン(Friedrich Hölderlin, 1770-1843)の詩句「そしてあの聖なる緑(das heilige Grün)、世界の至福にして深遠な/生命の証人たる緑は、

私を元気づけて、青年に若返らせてくれるのだ」⁽⁶⁷⁾の思想を想起させる。

グリムがKHMに版を追って挿入した非常に多くのことわざと慣用句に対する問題関心は近年特に高まりを見せて、現在のグリム研究においてアクチュアルな問題として集中的に議論されている⁽⁶⁸⁾。ことわざ風の慣用句は、民俗性や民衆性を最もよく反映しているものである。グリム兄弟がどの程度まで既にKHMの初版において聞き書きテキストにことわざや慣用句を挿入したかを確定することは事の性質上きわめて困難であるが、改訂増補されて1819年に刊行されたKHM第二版からは意識的に相当な程度の挿入がなされていることは、それらを初版と比較して見れば一目瞭然である。ヴィルヘルム・グリムは1850年刊行のKHM第六版の序文の中で、遅ればせながら次のように明言している。「私は、自分がいつも聞き耳を立てている民衆の格言や独特の慣用句を取り入れることに、絶えず努めて来ました。」⁽⁶⁹⁾ ちなみに、このKHM第六版が刊行されたのとはほぼ同時期の1854年から順次出版され始めた『グリムのドイツ語辞典』⁽⁶⁰⁾において、グリム兄弟はことわざや慣用句を含めたドイツ語の用法と典拠を詳細に提示している。

ブルームとレレケの調査によれば、1857年のKHM第七版（最終版）には全部で420例のことわざや慣用句が受け継がれたり新たに挿入されたりしており、その中の35例は2回以上、18例は3回以上登場しているので、結局全体として約600例が認められる。これらのことわざや慣用句の中には、“über Stock und Stein”（しゃにむに、[切り株だろうが、ごろた石だろうが、乗り越えて]）や、“mit Haut und Haar”（余すところなく、[皮も毛も]丸ごと）のように頭韻（Alliteration）を踏むもの、“in Saus und Braus leben”（飲めや歌えの大騒ぎで明け暮れる）や、“da war nichts als Schnee die Weite und Breite”（外は見渡す限り雪ばかりだった）のように行中韻（Binnenreim）を踏むもの、さらに民衆的な対句法（Parallelismus）などが多く見られる。韻文は言葉に対する敬意を示すものであり、ことわざ、慣用句、韻を踏んだ格言などは、民衆がその生活を一層より高次の普遍的なものへ結び付ける「通俗哲学」（Popularphilosophie）である。

そこで次に、KHM第七版から実例として特にポピュラーな話のいくつかを取り上げて、そこに登場する実際のことわざと慣用句を列挙してみよう。またその際に、それらの初出、つまり何版からKHMに登場するのかを、ブルームとレレケの調査⁽⁶¹⁾を参考にして付記する。

VIII

KHM 1 蛙の王様 【1812年初版第一巻以来採録】

1. 「まだ人の願い事がかなった頃」(In den alten Zeiten, wo das Wünschen noch geholfen hat)
[1837年第三版に初出]
2. 「そんなに泣いたら、石でも可愛想に思うでしょう」(… du schreist ja, daß sich ein Steinerbarmen möchte) [1837年第三版に初出]
3. 「お馴染みの水のぺっちゃんりぺっちゃんりさん」(alter Wasserpatscher) [1837年第三版に初出]
4. 「約束したことは守らなければならない」(Was du versprochen hast, das mußt du auch halten)
[1812年初版に初出]

「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)の形成とその特質

5. 「しかし彼女の方は、一口一口がほとんど喉を通らなかった」(aber ihr blieb fast jedes Bißlein im Halse) [1812年初版に初出]

KHM 15 ヘンゼルとグレーテル 【1812年初版第一巻以来採録, 1843年第五版以後大幅変更】

1. 「食べるものが殆どなかった(素寒貧であった)」(hatte wenig zu beißen und brechen) [1812年初版に初出]
2. 「どうしてそんな気になれよう」(wie sollt' ich's über Herz bringen) [1812年初版に初出]
3. 「もうおしまいだね」(nun ist's um uns geschehen) [1812年初版に初出]
4. 「気をつけな, 足元をうっかりするなよ」(hab acht und vergiß deine Beine nicht) [1819年第二版に初出]
5. 「彼の胸にこたえた(気になって仕方がなかった)」(war ihm zu Herzen gegangen) [1837年第三版に初出]
6. 「手も足も出ない」(Not in allen Ecken) [1843年第五版に初出]
7. 「もう, 一塊のパンが半分あるっきり。それがなくなりゃ, それでおしまいだ」(wir haben noch einen halben Laib Brot, hernach hat das Lied ein Ende) [1843年第五版に初出]
8. 「Aと言ったからには, Bと言わなければならない」(Wer A sagt, muß auch B sagen) [1843年第五版に初出]
9. 「このバカな女(ガチョウ)め」(Dumme Gans) [1850年第六版に初出]
10. 「わたしの話はこれでおしまい。あそこにネズミが走ってる。あれを捕まえた人は, あれで大きな大きな毛皮の頭巾をこしらえていいよ」(Mein Märchen ist aus, dort läuft eine Maus, wer sie fängt, darf sich eine große, große Pelzkappe daraus machen) [1843年第五版に初出]

KHM 20 勇敢な仕立て屋 【1812年初版第一巻以来採録, 1819年第二版以後混交】

1. 「彼は上機嫌だった」(Es war guter Dinge) [1837年第三版に初出]
2. 「まずくはあるまい」(Das wird nicht bitter) [1837年第三版に初出]
3. 「蠅はドイツ語が分からなかった」(Die Fliegen aber, die kein Deutsch verstanden) [1819年第二版に初出]
4. 「遂に, 一般によく言われるように, 仕立て屋の肝臓にシラミが這い出した(かんしゃく玉が破裂した)」(Da lief dem Schneiderlein endlich, wie man sagt, die Laus über die Leber) [1819年第二版に初出]
5. 「一打ちで七匹!」(Siebene auf einen Streich!) [1810年の祖稿に初出]
6. 「そして彼の心臓は, 嬉しさのあまり, 子羊の尻尾みたいにユラユラ揺れた」(und sein Herz wackelte ihm vor Freude wie ein Lämmerschwänzchen) [1819年第二版に初出]
7. 「いよいよ彼は勇ましく歩きだした」(Nun nahm er den Weg tapfer zwischen die Beine) [1819年第二版に初出]
8. 「そんなこたあ, 俺たちの方じゃ, 子どもだままだよ」(Das ist bei unsereinem Spielwerk) [1837年第三版に初出]

9. 「彼は後ろの方で大浮かれ上機嫌で、… 木を担ぐことなんか子どもの遊び事でもあるかのよう
に」(Es war dahinter ganz lustig und guter Dinge …, als wäre das Baumtragen ein Kinderspiel)
[第一文は1837年第三版に初出, 第二文は1819年第二版に初出]
 10. 「いつも、自分のとんがった鼻の向いた方へ」(immer seiner spitzen Nase nach) [1819年第二版
に初出]
 11. 「相手も同じしっぺ返しをした(同じ硬貨で支払った)」(Der andere zahlte mit gleicher Münze)
[1819年第二版に初出]
 12. 「うまく行った、… 奴らは俺に指一本(髪の毛一本)触れることもなかったよ」(Das hat gute
Wege, … kein Haar haben sie mir gekrümmt) [1819年第二版に初出]
 13. 「どうしたらこの豪傑を厄介払い出来るか」(wie er sich den Helden vom Hals schaffen könnte)
[1837年第三版に初出]
 14. 「これで、金的(小鳥)をせしめたわけだな」(Jetzt habe ich das Vöglein) [1837年第三版に初
出]
 15. 「王様はもっと胸にこたえたことだろうに」(es wäre ihm noch mehr zu Herzen gegangen)
[1837年第三版に初出]
 16. 「若殿がどんな裏町で生まれたのか」(in welcher Gasse der junge Herr geboren war) [1819年第
二版に初出]
 17. 「ひとつ、邪魔をしてやれ」(Dem Ding will ich einen Riegel vorschieben) [1837年第三版に初
出]
 18. 「まるで伝説にある嵐の夜に狩猟する魔王の従者たちが彼らの背後にいるかのように」(als wenn
das wilde Heer hinter ihnen wäre) [1837年第三版に初出]
- KHM 21 灰かぶり 【1812年初版第一巻以来採録, 1819年第二版以後混交】
1. 「バカな女(ガチョウ)」(die dumme Gans) [1850年第六版に初出]
 2. 「パンを食べたい者は、自分で稼ぐのがあたりまえさ」(Wer Brot essen will, muß es verdienen)
[1812年初版に初出]
- KHM 27 ブレーメンの音楽隊 【1819年第二版以来採録】
1. 「風向きの良くないのに気づいた」(merkte, daß kein guter Wind wehte) [1819年第二版に初出]
 2. 「ぱくり [一種の番犬の名]」(Packan) [1840年第四版に初出]
 3. 「ひげそうじ [猫の名]」(Bartputzer) [1840年第四版に初出]
 4. 「三日も雨が続いたような顔をしていた」(machte ein Gesicht wie drei Tage Regenwetter)
[1825年『小版』に初出, 続いて1837年第三版]
 5. 「命にかかわるときに」(wenn's einem an den Kragen geht) [1819年第二版に初出]
 6. 「うまい知恵がなくって、困っているところさ(良い忠告は高価だ)」(nun ist guter Rat teuer)
[1819年第二版に初出]
 7. 「骨の髄まで染みわたる」(durch Mark und Bein) [1819年第二版に初出]

「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)の形成とその特質

8. 「一カ月も断食するかのようになり、食べに食べた」(aßen, als wenn sie vier Wochen hungern sollten) [1819年第二版に初出]

9. 「脅しつけられる」(ins Bockshorn jagen lassen) [1819年第二版に初出]

10. 「このお話しは聞き立てのホヤホヤ(これを最後に話した人の口はまだ暖かい)」(Und der das zuletzt erzählt hat, dem ist der Mund noch warm) [1819年第二版に初出]

KHM 53 白雪姫 【1812年初版第一巻以来採録, 1819年第二版以後一部変更】

1. 「おきさきは … 妬ましきのあまり黄色くなったり青くなったりした」(Die Königin … ward gelb und grün vor Neid) [1837年第三版に初出]

2. 「昼も夜も」(Tag und Nacht) [1819年第二版に初出]

3. 「まるで胸から石が転がり落ちたよう」(als wär ein Stein von seinem Herzen gewälzt) [1819年第二版に初出]

4. 「世界中の金貨をもらったって、これはあげない」(wir geben ihn nicht um alles Gold in der Welt) [1819年第二版に初出]

KHM 55 ルンベルシュティルツヒェン 【1812年初版第一巻以来採録】

1. 「キツネとウサギがお互いにおやすみなさいを言っている(辺鄙な)ところ」(wo Fuchs und Has sich gute Nacht sagen) [1819年第二版に初出]

以上において取り上げたことわざや慣用句は、KHM全体で約600例ある中のごく一部分に過ぎないが、これらの実例からも慣用句に対するヴィルヘルム・グリムの寵愛の一端が伺える。彼のこうした俚諺学(Parömiologie)への関心は、いわゆる「通俗哲学」(Popularphilosophie)と「民衆教育学」(Volkspädagogik)のコンセプトに基付いている。

結論的に言えば、ヴィルヘルム・グリムの樹立した新しい文芸ジャンルとしての「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)は、同時代人のペスタロッチ(Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827)などの「民衆教育学」とは異なった、もう一つの「民衆教育学」の形態であり、「美的教育」(Ästhetische Erziehung)の一形態としての文学的一般陶冶(literarische Allgemeinbildung)なのであって、まさにこうした点において、文芸学のみならず美的教育学的にも極めて注目すべきものがあると言えよう。

註

(1) 定価は40銭。これは、当時(明治20年頃)米1kgが5.18銭、工場制手工業の綿糸織工の日当が男で21銭、女で10銭、田舎の日雇いの日当が男で15銭、女で9銭であったから、民衆には縁遠い値段であった。(Y.Noguchi, Die erste japanische Übersetzung Grimmscher Märchen und ihr geschichtlicher Hintergrund, in: Brüder Grimm Gedenken 3. Marburg 1981, S.422-434. 特にS.429. 参照。)

(2) Vgl. Des Knaben Wunderhorn. Alte deutsche Lieder. Gesammelt von Achim von Arnim und Clemens Brentano. 3 Bde. (1805-1808). Kritische Ausgabe. Hrsg. und kommentiert von H.Rölleke. Reclam, Ph. 1987.

(3) 詳細は、註(2)の文献のBd.3の巻末の「草稿(Vorlage)とその仲介者たちの一覧表」の項目にある次の記載を参照。

“**Grimm, Jacob (1785-1863)** / Heid.Hs. 2110,19 / Wh II 52b, 383, III 112a, 118 (+Brentano), KL 33 / TV: Wh II 31, III 65 / UB Marburg, Hs. 807 / Wh II 444, KL 83b / StB Berlin, Preußischer Kulturbesitz, Grimm-Schrank: / KL 77c, 87b, 93b, 96c. / < … > / **Grimm, Wilhelm (1786-1859)** / Heid.Hs. 2110,19 / Wh III 46, 74, KL 60b, 72b, 83a / TV: KL 81c, 87a / Heid.Hs. 2110,33 / Wh II 11a, KL 27b / **Grimm, Brüder [u.a.]** / StB Berlin, Preußischer Kulturbesitz, Ms. germ. 4° 709: / Wh II 34 (W.Grimm), 119 (unbekannte Hand), 180 (W.Grimm), 393 (W.Grimm), 435 (W.Grimm), Wh III 99 (W.Grimm), 113 (W.Grimm)” (in: Des Knaben Wunderhorn. a.a.O., Bd.3, S.545f.) 【略語一覧: Heid.Hs.=Signaturen der UB Heidelberg; UB=Universitätsbibliothek; Wh=Des Knaben Wunderhorn; KL=Kinderlieder, Anhang zum Wunderhorn; ローマ数字=巻数; アラビア数字=原版において当該の歌が始まる頁数; TV=Teil-Vorlage; StB=Staatsbibliothek】

(4) Vgl. H.Rölleke, Die Beiträge der Brüder Grimm zu “Des Knaben Wunderhorn”, in: Brüder Grimm Gedenken 2. Marburg 1975, S.28-42.

(5) Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der handschriftlichen Urfassung von 1810 und der Erstdrucke von 1812. Hrsg. und erläutert von H.Rölleke. Cologne-Genève 1975, S.52. 【「エーレンベルク手稿」7番(筆跡ヤーコプ・グリム)】 全文は以下のとおり。

“Allerlei Rauch wird von der Stiefmutter vertrieben, weil ein fremder Herr ihre eigne Tochter vernachlässigt u. der Stieftochter einen Ring verehrt hatte zum Liebeszeichen. Sie entrinnt, kommt an des Herzogs Hof als Schuhputzerin, geht heiml. u ungekannt auf den Ball und kocht endlich dem Herzog eine Suppe, den Ring unters Weißbrot legend. Dadurch wird sie entdeckt und des Herzogs Gemahlin.”

(6) Vgl. Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. a.a.O. — Vgl. W.Schoof, Zur Entstehungsgeschichte der Grimmschen Märchen. Bearbeitet unter Benutzung des Nachlasses der Brüder Grimm. Hamburg 1959.

(7) Vgl. H.Rölleke, Die Urfassung der Grimmschen Märchensammlung von 1810: Eine Rekonstruktion ihres tatsächlichen Bestandes (1974), in: ders., “Wo das Wünschen noch geholfen hat”: Gesammelte Aufsätze zu den “Kinder- und Hausmärchen” der Brüder Grimm. Bonn 1985, S.26-32.

(8) Vgl. H.Rölleke, Zur Vorgeschichte der *Kinder- und Hausmärchen*: Bislang unbekanntes Materialien im Nachlaß der Brüder Grimm (1978), in: ders., a.a.O., S.33-38.

(9) Der Nachlass der Brüder Grimm. Katalog. Teil 1, Bearb. v. R. Breslau. Staatsbibliothek zu Berlin — Preussischer Kulturbesitz. Kataloge der Handschriftenabteilung. Zweite Reihe: Nachlässe. Bd 3. Wiesbaden 1997, S.637. (なお, Faufreluschens は, Fanfreluschens の誤植と思われる。)

(10) Vgl. Rölleke, a.a.O., S.36.

(11) Kinder- und Haus-Märchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Kleine Ausgabe. Mit sieben Kupfern. Berlin, 1825. 【ファクシミリ復刻版として, Grimms Märchen. Die kleine Ausgabe aus dem Jahr 1825. Mit einem Nachwort von Hermann Gerstner. Dortmund 1982. 参照。】

このKHM『小版』初版にL.E.グリムの描いた7枚の挿絵は、「マリアの子」「ヘンゼルとグレーテル」「灰かぶり」「赤ずきん」「いばら姫」「白雪姫」「ガチョウ番の娘」の7話に各1枚ずつ添えられているが、興味深いことに、KHMのテキストの変化に富んだ長い歴史の最後の証しであると同時にヴィルヘルム・グリムの最後の出版物でもあるKHM『小版』第十版(1858年)にルートヴィヒ・ピーチュ(Ludwig Pietsch)が描いた7枚の挿絵の中の6枚は初版と同じ6話に添えられているが、あとの1枚が「いばら姫」にではなく「雪白と薔薇紅」(1850年からKHM 124「三人兄弟」に代わってKHM『小版』に採録された)に添えられている。この事実からも、ヴィルヘルム・グリムが「雪白と薔薇紅」のテキストを如何に尊重したかが伺える。Vgl. Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Kleine Ausgabe von 1858. Mit Illustrationen von Ludwig Pietsch und einem Nachwort von Heinz Rölleke, Insel Verlag 1985.

ちなみに現在では、児童書挿絵画家として最も著名なセンダック(Maurice Sendak)が“The Juniper Tree and Other Tales from Grimm. Selected by Lore Segal and Maurice Sendak. New York 1973, 1992”(ドイツ語訳 1974年, 邦訳 1986年)の中で、27枚の様式的に極めて特異なアレゴリー風のペン画を描いて、非常に強い関心を呼んでいる。例えば, Wolfgang Hildesheimer über Sendak und Grimms Märchen. Ungeheuerliche, böse Welt, in: Der Spiegel, Jg.28, Nr.52, 23.12.1974, S.92f. 参照。

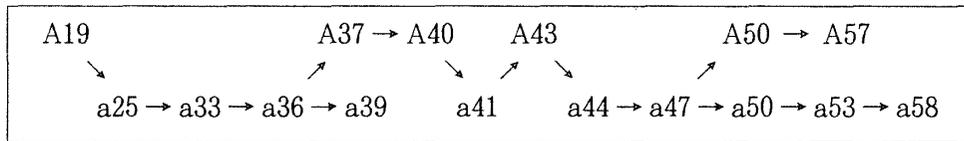
(12) German Popular Stories, Translated from the Kinder und Haus Märchen, collected by M.M.Grimm, From Oral Tradition. Published by C.Baldwyn. London, 1823. 【ファクシミリ復刻版として, JACOB and WILHELM GRIMM, German Popular Stories. Translated by Edgar Taylor. Illustrated by George Cruikshank. Reprinted from the original english edition of 1823 in facsimile. Menston, Scolar Press 1971. 参照。】

このテイラー版は英語圏の読者層のための版としてのみならず、さらに英訳から他の言語への重訳のための定本としても少なからぬ意義を有している。このテイラーのテキストと風刺画家クルックシャンクの挿絵のある二巻本(第一巻1823年, 第二巻1826年)を翻刻した合本(55話, 挿絵19枚)が1948年にイギリスのPuffin Books by Penguin Booksから出版されたが、その後も版を重ねて現在でも発行されている【但し, 初版にある巻頭の序文(Preface)と巻末の註

(Notes) は削除されている】。Vgl. Grimms' Fairy Tales. Illustrated by GEORGE CRUIKSHANK, Puffin Books 1994. この翻刻版では、19枚の挿絵を描いた人気画家のクルックシャンクの名はタイトル・ページに大文字で大書されているが、奇妙なことに訳者のテイラーの名はどこにも記載されていない。

イギリスにおけるグリム童話の初期受容については、D.Blamires, *The Early Reception of the Grimms' Kinder- und Hausmärchen in England*, in: *Bulletin of the John Rylands University Library of Manchester*, 71. 1989. No.3, S.63-77. 参照。

- (13) KHMの『大版』(Aと略記)と『小版』(aと略記)のテキスト成立の関係については以下の系図を参照(例えばA37は1837年のKHM『大版』, a25は1825年のKHM『小版』を指す)。



[Vgl. L.Bluhm, *Grimm-Philologie. Beiträge zur Märchenforschung und Wissenschaftsgeschichte*. Hildesheim/Zürich/New York 1995, S.76.]

- (14) Vgl. Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm*. 3 Bde. Hrsg. v. H.Rölleke, Bd.3. Reclam, Ph. 1984.
- (15) Vgl. *Märchen aus dem Nachlaß der Brüder Grimm*. Hrsg. und erläutert von H.Rölleke. Bonn 1989.
- (16) L.Bluhm, *Grimm-Philologie*. a.a.O., S.27.
- (17) *Grimms Märchen wie sie nicht im Buche stehen*. Hrsg. und erläutert von H.Rölleke. Insel Verlag 1993, S.16.
- (18) H.Rölleke, *Die Märchen der Brüder Grimm. Eine Einführung*. Bonn; Berlin 1992, S.25f.
- (19) グリム兄弟の親戚ではない。アルニム/ブレンターノの『少年の魔法の角笛』に続くロマン派精神に満ちた二番目の児童文学書である『子どものメルヘン集』(“Kindermärchen”)を1809年に刊行した。【ファクシミリ復刻版として、A.L.Grimm, *Kindermärchen*. Nachdruck der Ausgabe Heidelberg 1809. Mit einem Nachwort und Kommentaren von E.Schade. Olms-Weidmann 1992. 参照。】
- (20) グリム兄弟の蔵書目録のNr.16に次のような記載がある。
 “GRIMM, Jacob, und Wilhelm GRIMM: [Kinder- und Hausmärchen, engl.] German popular stories. [Übers. Edgar Taylor.] [1.] 2. London: Baldwyn (2: Robins) 1823-1826. / 40.553 - [nicht nachweisbar]” (in: *Die Bibliothek der Brüder Grimm. Annotiertes Verzeichnis des festgestellten Bestandes*. Hrsg. v. F.Krause. Bearb. v. L.Denecke; I.Teitge. Weimar 1989, S.42, Nr.16.)
- (21) Vgl. L.Bluhm, *Grimm-Philologie*. a.a.O., S.116.
- (22) Vgl. R.Michaelis-Jena: *Edgar und John Edward Taylor, die ersten englischen Übersetzer*

der Kinder- und Hausmärchen, in: Brüder Grimm Gedenken 2. Marburg 1975, S.183-202.

- (23) Jacob Grimm an Karl Lachmann. 12.5.1823, in: Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm. Hrsg.v. A.Leitzmann. Jena 1927. Bd.1, S.390.
- (24) A.a.O., S.390.
- (25) Vgl. W.Kaminski, Vom Zauber der Märchen. Ein pädagogischer Leitfaden zu den Sammlungen der Brüder Grimm. Mainz 1997, S.32f.
- (26) Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815 nach dem Handexemplar des Brüder-Grimm-Museums Kassel mit sämtlichen handschriftlichen Korrekturen und Nachträgen der Brüder Grimm sowie einem Ergänzungsheft: Transkriptionen und Kommentare in Verbindung mit U.Marquardt von H.Rölleke. Göttingen 1996, Bd.2, S.VIII.
- (27) A.L.グリムは1816年に、グリム兄弟のKHM【初版】の大部分は民話であって、子ども向けの童話ではないとして、「だれも二人の主人に仕えることはできない」(“Niemand kann zweyen Herren dienen.”)という聖書(マタイ伝 6.24)の言葉をもじって揶揄した。他方、アルニムはKHM初版第二巻の読後感を、ヴィルヘルム・グリム宛の書簡(1815年2月10日付け)で次のように述べている。「メルヘンは子どものためにだけでなく、子どもと大人の間奏曲(Zwischenspiel)として考案されたものだから、子どもと大人がそれぞれ何か別のものを楽しむ中で、両者が同じ多さのものをメルヘンから受け取ることが出来るのであり、メルヘンは両者を同じ華麗さで魅惑するのです。」(Vgl. Kinder- und Hausmärchen: nach der zweiten, vermehrten und verbesserten Auflage von 1819, textkritisch revidiert und mit einer Bibliographie der Grimmischen Märchen versehen / Brüder Grimm. Hrsg. von H.Rölleke, Bd. 2. München 1992, S.540-543.)
- (28) Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. 3 Bde. Hrsg. v. H.Rölleke, Bd.1. Reclam, Ph. 1984, S.16-17.
- (29) W.Grimm, Kleinere Schriften 1 (1881). Nach der Ausgabe von G.Hinrichs neu hrsg. von O.Ehrismann, Olms-Weidmann 1992, S.359.
- このグリムの宗教的基本感情や、植物的な有機体的発達というロマン主義的な人間発達の思想は、同時代のフレーベル(Friedrich Fröbel, 1782-1852)の教育思想において典型的に現れている。Vgl. O.F.Bollnow, Die Pädagogik der deutschen Romantik: von Arndt bis Fröbel. Stuttgart 1952, 1967. 拙訳『フレーベルの教育学—ドイツ・ロマン派教育の華—』理想社, 1973年, 1982年, 参照。
- (30) L.Blumh, Grimm-Philologie. a.a.O., S.8.
- (31) W.Kaminski, a.a.O., S.33.
- (32) Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen. a.a.O., Bd.1, S.17.
- (33) Brüder Grimm, a.a.O., Bd.1, S.21.

- (34) 「通常、ある文学的形物がメルヘンとして承認されるのは、それが——一般的に言えば——グリムのKHMに見出されるものと多少とも一致する場合である。かくして我々もまた、メルヘンの概念を自ら規定する前に、まず一般的にグリムのジャンル (Gattung Grimm) という言い方をしたい。」 (in: A.Jolles, Einfache Formen. Legende, Sage, Mythe, Rätsel, Spruch, Kasus, Memorabile, Märchen, Witz. Halle 1930, Tübingen 1982, S.219.)
- (35) In: Märchenalmanach für Söhne und Töchter gebildeter Stände auf das Jahr 1827 herausgegeben von Wilhelm Hauff. Stuttgart 1827 <recte: 1826>, S.269-278; jetzt, in: Wilhelm Hauff, Sämtliche Märchen. Reclam, Ph. 1986, S.427-431. — Vgl. H.Rölleke, Schneeweißchen und Rosenroth. Rätsel um ein Grimmsches Märchen (1983), in: ders., “Wo das Wünschen noch geholfen hat” : a.a.O., S.191-206.
- (36) Unbekannte Märchen von Wilhelm und Jacob Grimm. Hrsg. und erläutert von H.Rölleke. Köln 1987, S.17f.
- (37) 「エーレンベルク手稿」24番, KHM 初版第一巻以来19番。1843年第五版からは、ルンゲの長兄のヨーハン・ダニエル・ルンゲ (Johann Daniel Runge) 編集の『Ph.O.ルンゲ遺稿集』(1840年)に拠ってテキストに手を加えているが、実はヨーハン・ダニエル・ルンゲは従来のKHM稿を何とかしてハンプルク方言に書き直そうとしたことに、ヴィルヘルム・グリムは気づかなかった。なお『Ph.O.ルンゲ遺稿集』は、グリム兄弟の蔵書目録のNr.3238に次のように記載されている。
- “RUNGE, Philipp Otto: Hinterlassene Schriften. Hrsg. von dessen ältestem Bruder [Johann Daninel Runge]. 1.2. Hamburg: Perthes 1840-1841. <…> / 36.692 - Yt 13902” (in: Die Bibliothek der Brüder Grimm. a.a.O., S.272, Nr.3238.)
- さらに、H.Rölleke, Von dem Fischer un syner Fru. Die älteste schriftliche Überlieferung (1973), jetzt in: ders., “Wo das Wünschen noch geholfen hat” : a.a.O., S.161-174. 参照。
- (38) KHM 初版第一巻以来47番。1843年第五版からは、同じく1840年のヨーハン・ダニエル・ルンゲによる改悪テキストに拠っている。
- (39) Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen. a.a.O., Bd.1, S.22.
- (40) Vgl. W.Kaminski, a.a.O., S.23; — Vgl. L.Blumh, Grimm-Philologie. a.a.O., S.26f.
- (41) Vgl. L.Blumh, a.a.O., S.66.
- (42) H.Rölleke, Die Märchen der Brüder Grimm. a.a.O., S.79.
- (43) 小澤俊夫『完訳グリム童話—子どもと家庭のメルヒェン集—』II, ぎょうせい, 1985年, 493頁。
- (44) 同『グリム童話の誕生 聞くメルヒェンから読むメルヒェンへ』朝日選書, 1997年, 302-308頁。
- (45) H.Rölleke, a.a.O., S.80f.
- (46) H.Rölleke, Zur Biographie der Grimmschen Märchen, in: Kinder- und Hausmärchen: nach der zweiten, vermehrten und verbesserten Auflage von 1819. a.a.O., S.568.

- (47) L.Bluhm, a.a.O., S.1.
- (48) L.Bluhm, a.a.O., S.64.
- (49) W.Frühwald, Die Ehre des Geringen. Ein Versuch zur Sozialgeschichte literarischer Texte im 19. Jahrhundert, in: Geschichte und Gesellschaft 9 (1983), H.1, S.69.
- (50) L.Bluhm, a.a.O., S.IX.
- (51) Vgl. J.P.Hebel, Schatzkästlein des rheinischen Hausfreundes (Tübingen 1811). Kritische Gesamtausgabe mit den Kalender-Holzschnitten. Reclam, Ph. 1981.
抄訳として、木下康光訳『ドイツ炉辺ばなし集—カレンダーゲシヒテン—』岩波文庫, 1986年, —有内嘉宏訳『ドイツ暦物語』鳥影社, 1992年, 参照。
- (52) “Der Rheinländische HAUSFREUND oder neuer Calender mit lehrreichen Nachrichten und lustigen Erzählungen. Karlsruhe [usw.] 1811, 1813-1815.” (in: Die Bibliothek der Brüder Grimm. a.a.O., S.64, Nr.267.)
- (53) 上記のグリム兄弟の蔵書目録のNr.267の項目に、次のような記載がある。
“-- 1814: J.: Dies Expl. hat mir Hebel geschenkt. Carlsr. 1814. Jacob Gr.”
- (54) L.Bluhm/H.Rölleke, “Redensarten des Volks, auf die ich immer horche” : Märchen-Sprichwort-Redensart; zur volkspoetischen Ausgestaltung der *Kinder- und Hausmärchen* durch die Brüder Grimm. Neue Ausgabe. Stuttgart/Leipzig 1997, S.121.
- (55) Vgl. L.Bluhm, Grimm-Philologie. a.a.O., S.39.
- (56) Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen. a.a.O., Bd.1, S.20.
- (57) F.Hölderlin, Der Wanderer, in: Hölderlin Gedichte. Hrsg. und mit Erläuterungen versehen von J.Schmidt. Insel Verlag 1984, S.107.
さらに、拙論「ボルノウの遺稿断片『人間と自然』について—その解釈学的哲学の射程について—」, 『九州大学教育学部紀要(教育学部門)』第38集, 1992年, 1-17頁, 参照。
- (58) Vgl. W.Mieder, “Findet, so werdet ihr suchen!”. Die Brüder Grimm und das Sprichwort. Bern 1986. —Vgl. L.Bluhm/H.Rölleke, “Redensarten des Volks, auf die ich immer horche” : a.a.O.
- (59) Brüder Grimm, a.a.O., Bd.1, S.27.
- (60) Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm. XVI Bde. (sowie Quellenverzeichnis), Leipzig 1854-1971. Fotomechan. Nachdr. München 1984. この全XVI巻の中で、グリム兄弟自身が執筆出来たのは、I.Bd.: A bis Biermolke. Leipzig 1854. —II.Bd.: Biermörder bis D. 1860. —III.Bd.: E bis Forsche. 1862. —IV.Bd. 1.Abt. von J.Grimm, K.Weigand und R.Hildebrand: Forschel bis Gefolgsmann. 1878.までであった。
- (61) Vgl. L.Bluhm/H.Rölleke, “Redensarten des Volks, auf die ich immer horche” : a.a.O.

Hervorbringung der “Gattung Grimm” und ihre Eigenschaft
— Die ästhetisch-pädagogische Dimension der KHM —

Hideakira Okamoto

Auf Veranlassung von Clemens Brentano zu der Mitwirkung an den weiteren “*Des Knaben Wunderhorn*” Bänden haben Brüder Grimm im Zeitgeist der Romantik ab 1807 begonnen, die alten Märchen zu sammeln. Am Anfang legten sie keine kinderfreundliche Leseausgabe, sondern eine wissenschaftliche Materialsammlung der Volksüberlieferung vor. Aber bereits in der Vorrede zum 2. Band (1815) der ersten Auflage der “*Kinder- und Hausmärchen*” (KHM) trat als weiteres relevantes Motiv “ein eigentliches Erziehungsbuch” hinzu.

Als Voraussetzung dafür gab es damals die Idee der Romantik sowie die allgemeine sozialgeschichtliche Situation in Deutschland. Nach Heinz Rölleke waren und sind bürgerlicher Familiensinn, eine ganz neue Hochschätzung des Kindes als eigenständige Persönlichkeit usw. — der europäischen Sozialgeschichte des 19., aber auch etwa der japanischen des späten 20. Jahrhunderts ungefähr kongruent — immer erneut gewichtige Voraussetzungen für die begeisterte Rezeption der Grimmschen Märchen.

Wilhelm Grimm sah sowohl im Volksmärchen als auch im Kindermärchen dieselbe Reinheit, Natürlichkeit und Echtheit. Nach Lothar Bluhm sind die Grimms und ihre KHM also an dieser “ästhetischen Pädagogik” verpflichtet.

Indem nämlich Wilhelm Grimm auf der Suche nach dem echten Ton der alten Volksmärchen war und diesem sich durch seine Überarbeitungen zu nähern glaubte, fand er seinen eigenen geschmeidigen Märchentönen und schuf er damit die von André Jolles genannte “Gattung Grimm” als eine ganz neue literarische Gattung. Dabei wurden vor allem viele sprichwörtlichen Redensarten des Volks, auf die er immer horchte, interpoliert, um die volks- und kindertümlichen Merkmale der Gattung zu vermehren.

In diesem Beitrag analysieren wir eingehend die Herausbildung und die Eigenschaft dieser “Gattung Grimm”, und arbeiten damit die ästhetisch-pädagogische Dimension der KHM heraus, die hermeneutisch als eine Volkserziehung durch eine literarische Allgemeinbildung in Gestalt von der ästhetischen Erziehung verstanden werden kann.